

〈報告〉

同朋大学社会福祉学部 平成 30 年度大学教育改革推進事業

中部圏教育改革ネットワーク

(旧産業界のニーズに対応した教育改善・充実整備事業)

～平成 30 年度の実践報告～

目 黒 達 哉

はじめに

平成 24 年 9 月 20 日に、本学社会福祉学部は、文部科学省の「産業界のニーズに対応した教育改善・充实体制整備事業」に『前に踏み出し、考え抜き、チームで社会と結びつく教育力の成長』というテーマで、三重大学を幹事校として中部圏の 25 大学で応募したところ選定された。選定されましたことは、長年培って来た本学社会福祉学部の社会福祉教育が高く評価されたと思われる。なお、平成 26 年度でもってこの事業は無事に終了した。しかし、この取り組みの重要性和大学の首脳部のご尽力により、平成 27 年度からは、引き続き大学の自己資金で運営されることになった。

「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の 3 つの能力 (12 の能力要素) から構成されている。「社会人基礎力」は、「職場や地域社会で様々な人々と仕事をしていくために必要な基礎力」として、経済産業省が 2006 (平成 18) 年から提唱している。この社会人基礎力を、本学社会福祉学部では「福祉実践基礎力」と表現している。福祉実践基礎力とは、「心が動く力」、「じっくり考える力」、「共に生

きる力」の3つの能力（13の能力）から構成されている。「福祉実践基礎力」は、本学の建学の精神である『同朋和敬』の精神の社会福祉現場に具現化する要素として重要であると考えている。

I. 事業の概要と目的

現在まで、本学部では、まず初年次ゼミにおいてゼミ単位でのディベートやプレゼンテーションおよびフィールドワークを行って、能動的で自律的・自立的な学習態度の育成に努めている。そして、2～4年では、演習やゼミにおいて、さらに能動的な学習ができるよう促してきた。また、学外研修での施設見学やボランティア論、ボランティア活動などでの実体験をして、地域や福祉業界との連携を深めている。そして、円滑な学習を進めるためにアドバイザー制度で補完している。そこで、本事業では、今までの個々の教育改善を入学前プログラムと初年次教育の連結のための教材を作成・利用する有機的結合、講義科目での学生参加型授業の拡大、演習科目での共同学習の拡大と問題解決能力の育成、および講義・演習・実習科目との有機的結合を行うことにより、教育改革を全教員がチャレンジしてチームで働いて実施をしている。

このような取組により、従来の学士課程教育を活性化させ、学生の学習意欲の高揚をもたらすことができる。本取組の目的は、産業界（社会福祉現場）のニーズに対応した高度な専門性と実践力を身につけた福祉人材を育成ことである。そこで、本学部の学生が社会的・職業的に自立し、産業界のニーズに対応した人材となるための大きな柱は、1. アクティブラーニングを活用した教育力の強化、および2. 地域・産業界との連携力の強化〔((1)地域の産業界と連携した実学的専門教育の導入、(2)産学連携授業の実施、(3)地域の産業界と連携した実践的なインターンシップ〕である。

具体的には次のようになる。

1. アクティブラーニングを活用した教育力の強化

社会人基礎力のため、初期段階としては、初年次教育の基礎ゼミでマインド・マップ、KJ法、グループワークを実施している。

2. 地域・産業界との連携力の強化

(1) 地域の産業界と連携した実学的専門教育の導入

- ① 社会福祉現場のOB・OGとの連携による現状理解とニーズ把握
「同朋大学社会福祉学会・同朋大学社会福祉学部卒社会福祉関係従事者のつどい」「若手OB・OG研究会」
- ② 保育現場のニーズに対応した保育者養成「実践力を高めるキッズカレッジ」
- ③ キッズカレッジ実技講習会
- ④ 介護福祉業界のニーズに対応した社会福祉教育（介護福祉）
- ⑤ 産業界との協働による「精神障害者サポートプロジェクト」
- ⑥ 地域ニーズに応えるための「気軽に立ち寄れるボランティアサロン」

(2) 産学連携授業の実施

社会福祉現場で活躍している福祉実務家等と連携した実学的な科目を運営する。

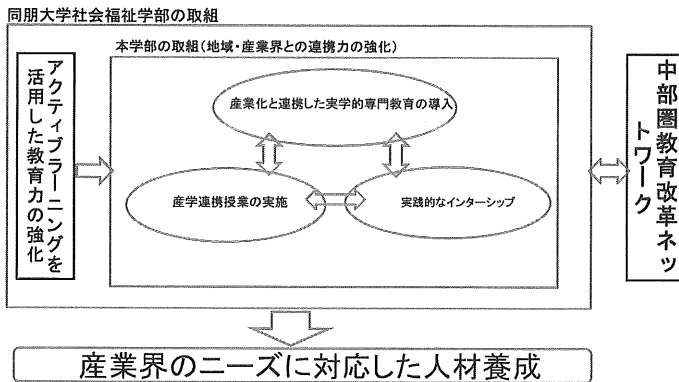
- ① キャリア支援講座Ⅰ・Ⅱ、② ボランティア活動、③ 国際ボランティア論
- ④ 傾聴活動論、⑤ その他（実務家を招聘する科目）

(3) 地域の産業界と連携した実践的なインターンシップの実施

地域の社会福祉施設、NPO法人、NGO団体、ボランティア団体等と協働・連携し、より実践的な内容のインターンシップに質的な変更を行う。

① インターンシップ I・II・III・IV

以上のような(1)～(3)の取り組みを有機的・体系的に組み合わせながら、産業界のニーズに対応した人材の育成を図る。さらに、地域の・産業界との連携強化を推進し、さらなるチャレンジに向けて取り組みの質の向上を図る。



なお、平成 27 年度以降、大学で経費を予算化し継続している。

II. 各事業の報告

<地域・産業界との連携力の強化> 「1.」～「14.」

1. 「同朋大学社会福祉学会・同朋大学社会福祉関係従事者の集い」

○目的

テーマである『差別・偏見と私たちはどう向き合うべきか～こころのバリアフリーを感じられる社会～』を具体的に考え・高め・交流する機会とした。

○内容

今回の学会では、『差別・偏見と私たちはどう向き合うべきか～こころ

のバリアフリーを感じられる社会～』というテーマでいろいろな視点から障害者福祉を見つめ、考えた。さらに今、福祉の現場で専門職として誇りを持って働いている従事者の方々から発信していただき、福祉を学ぶ学生と参加者が「生きがいをもって勤め続ける魅力」につながる内容を学び、理解した。その次に、4つの分野で働く卒業生から、事例を提示して頂き、今回のテーマを私たちが実践するために何が必要なのかを学んだ。

このフォーラムは、同朋大学が平成24～26年度まで文部科学省の「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制事業」として実践してきたものを、平成28年度からは大学独自で予算化し、引き続き福祉業界における人材養成に取り組んでいる事業である。

日時 12月1日(土)

会場 成徳館502教室

内容 ①基調講演

「誰にでもできる合理的配慮」

講師：平澤 恵美 准教授

『差別・偏見と私たちはどう向き合うべきか

～こころのバリアフリーを感じられる社会～』

講師：長谷川 貴大 氏 (Lot FALCOM)

②学生研究発表

中神ゼミ『保育現場における「アレ?」と感じる問題を探る』

～「若者ことば」のうつり変わりを通して考える～

シンポジウム『差別・偏見と私たちはどう向き合うべきか

～こころのバリアフリーを感じられる社会～』

(コーディネーター：藤林 清仁 専任講師)

目 黒 達 哉

①障害分野	小木曾 学	NPO 法人ささしま サポートセンター
②医療分野	竹野 大介 (H21 卒)	独立行政法人地域医療機能推 進機構 中京病院
③児童・保育分野	森下 真美 (H22 卒)	
④高齢者福祉分野	岡 久美子 (H19 年度修士修了)	シニアライフ研究所 りあもでんな代表

○成 果

学生は基調講演、研究発表、福祉現場で活躍している OB・OG のシンポジウムなどの企画から学生は福祉実践力を高めることができた。

2. 「実践力を高めるキッズカレッジ～学内実施型子育て支援活動～」

○目 的

本学社会福祉学科子ども学専攻では、演習科目に位置付けられている学内型子育て支援事業「キッズカレッジ」を実施しており、豊かな感性やコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、学び続ける意欲など精神面の強い学生を育てることを目的としている。

○内 容・実 績

平成 30 (2018) 年度は、名古屋市中村区在住の親子（平日は 6 ヶ月から就学前の乳幼児、休日は 1 歳から 4 歳まで）を対象に前期 17 回・後期 12 回の計 29 回実施され、述べ 1,327 名の地域の未就学園児とその保護者が参加した。学生も各学年の学びの進度に合わせながら 1 年次より参加している。

○成 果

学生は子どもと遊ぶなかで、子どもの発達や親子の姿に気づき、その気づきと授業での学びを結びつけながら保育職へのイメージを深めていった。また、地域の支援者の協力のもと安全で安心、そして楽しい活動を地域の親子に提供できるよう環境を整える大切さも学んだ。

3. 「キッズカレッジ実技講習会」

○目的

キッズカレッジ実技講習会は、同朋大学社会福祉学部社会福祉学科子ども学専攻の学生が主体となって企画運営している「キッズカレッジ」の実践に向けて、実践力の向上を目的に学ぶ機会を確保するため実施している。

○内容・実績

2018（平成30）年度のキッズカレッジ実技講習会は、千種わかすぎ保育園の飯沼友香先生と青木美依先生の2名を講師としてお招きし、保育現場についてのお話を聞いた。具体的には異年齢保育の話や聞くなど、保育実践のお話や保育士としてどのように頑張ってきたかなどの経験談を聞いた。学生の参加者は22名だった。

○成果

学生は、これらの実技講習を通して、子どもの反応や仕事への思いなどを学ぶこともできた。仕事をしていくうえで大切にしている思いなど、プロ意識について学ぶことができ福祉実践基礎力が高まった。また、自分の将来について、立ち止まって考える大切さに気付いた学生もいたようであった。

4. 「介護福祉業界のニーズに対応した社会福祉教育（介護福祉）」

○目的

入学間もない学生を対象とし、施設の使命や、職員の大切にしていることを学ぶ。また、学外研修修了後の振り返り等、研修修了後の学びとする。

○内容・実績

介護福祉コースでは、2年次より開始される介護福祉実習の事前学習と、施設のニーズに対応した社会福祉教育をかねて、毎年介護施設「あんしん生活葵」にて研修している。本年度は10月9日に、事前学習として施設職員に学内にきていただき、「あんしん生活蒼」の生活の様子と基礎的な

介護技術を学んだ。10月16日に施設に行く学外研修を実施した。10月17日に学内にて事後学習を実施した。

○成 果

これらの体験を通じて、介護技術を学ぶ意欲とコミュニケーション能力が高まった。

5. 「精神障害者サポートプロジェクト」

○目 的

地域に暮らす精神障害者が日頃利用できる場所として、精神科病院のデイケアや地域活動支援センター、就労継続支援施設などの障害福祉施設や事業所が存在する。それらは、「精神科医療機関を受診していること、精神障害者保健福祉手帳をもっていること」などの条件で利用登録し活用するものであるが、そのような制度などに縛られず、精神障害者がふらっと立ち寄れるような場所の提供を目指すのが、このプロジェクトの目的である。

○内 容・実績

平成30年度はそれを受けた形で当事者の家族（以下、家族）にインタビュー調査を行なった。そして家族はどのようなサポートを必要としているか把握した。

協力いただいたのは「特定非営利活動法人 名古屋市精神障害者家族会連合会」の会員10名である。調査は平成30年11月23日と12月9日の2回行なった。インタビュー内容は①毎日の生活で苦勞を感じていることは何ですか、②将来のことで不安なことがあるとすればどういうことですか、③どのようなサービスがあるとよいと思われますか、④他に何かお話ししたいことがありますかとの4点である。

○成 果

家族への直接支援、訪問してくれる支援、医療と福祉の間をつないでく

れる支援などを求めていることがわかった。

これらの調査にあたって、先方に意向を伝え了解を得ること、日程の調整等々、全て学生たちが行なった。慣れないことで戸惑っていた学生たちも家族と顔見知りになり、最終的には「よい精神保健福祉士になって当事者や家族の相談に乗って欲しい」と励まされていた。この経験が卒業後にも活かされていくものだと考える。

6. 「気軽に立ち寄れるボランティアサロン」

○目的

ボランティア活動を通して、利用者とのかかわり方を学び、また連携機関との協働のあり方を学び福祉実践基礎力を身に付けることを目的とする。

○内容・実績

社会福祉法人名古屋市中村区社会福祉協議会中村区サービスセンターの利用者（高齢者）が、月1回約2時間程度、来学する。学生はボランティアとして、高齢者の大学見学をサポート、職員も1~2名同行し、高齢者と学生がコミュニケーションを図る。学生は、「事前準備 ⇒ 実践（活動）⇒ 事後学習（フォローアップ）」という一連の学びの過程を通して福祉専門職としての「福祉実践基礎力」を身に付けた。平成30（2018）年度は、学生ボランティアの希望者を募り12回実施し、地域連携が徐々に深まっている。主な内容は、名古屋音楽大学学生によるミニコンサートを聴き、その後学生は高齢者の話に耳を傾ける傾聴活動を実施した。

○成果

この実践によって学生はコミュニケーション能力が高まった。

この事業は利用者（高齢者）だけではなく、職員も参加するので、学生は職員が利用者にかかわる姿を学び、それと同時に地域と大学の連携のあり方を学んだ。

7. 「キャリア支援講座Ⅰ・Ⅱ」

○目的

社会福祉現場で活躍されている同朋大学社会福祉学部のOB・OGを招聘し、福祉業界のニーズに応える人材育成を目指す講義である。

また、福祉実践基礎力、福祉実践力を高める取り組みでもある。なお、福祉業界のみでなく、企業等で活躍されているOB・OGも招聘し視野を広めてもらう。

児童福祉、障害者福祉、高齢者福祉、精神保健福祉、教育、国際、心理の各分野で活躍されているOB・OGを招聘し、講義を拝聴し、またOB・OGとコミュニケーションを図る場とする。

○内容・実績

① キャリア支援講座Ⅰ（前期・2単位、選択科目）

主として、OB・OGが福祉職を志そうと思った動機や仕事の内容、学生時代をどのように過ごしていたかを中心に講義をしていただくこととする。

② キャリア支援講座Ⅱ（後期・2単位、選択科目）

主として、OB・OGから現場が求めている人材について講義をしていただくこととする。

キャリア支援Ⅰ、Ⅱともに毎週水曜日の3限（13時～14時30分）に実施された。

○成果

OB・OGの講義を拝聴し、現場が求めている人材像を知ることができ、福祉実践基礎力が高まった。

8. 「ボランティア活動」

○目 的

ボランティア活動を通して、利用者とのかかわり方を学び、また連携機

関との協働のあり方を学び福祉実践基礎力を身に付けることを目的とする。

○内容 社会福祉法人若竹荘あけぼの作業所の連携機関の協力を得て、知的障害者の生活介護事業を実践する。『事前学習・準備 ⇒ 実践（活動）⇒ 事後学習（フォローアップ）』という一連の学びの過程を通して福祉専門職としての福祉実践基礎力を身に付ける。いずれも実学的専門教育である「ボランティア活動」の授業の中で実施した。

○内容・実績

1) 知的障害者の生活介護事業（あけぼの作業所の利用者と学生の交流会）

「ボランティア活動」の授業時間内で事前学習・準備、事後学習（フォローアップ）を実施した。尚、活動の実績は以下の通りである。

- ① 平成30年7月7日（土）10時～15時、同朋大学で学生が企画・立案したレクリエーションによって実施された。
- ② 平成30年12月8日（土）10時～15時、あけぼの作業所で学生が企画・立案したレクリエーションによって実施された。

2) ボランティア活動フォローアップの実施

平成30年12月15日（土）13時00分～14時30分、同朋大学において、今年度のボランティア活動の総括とコミュニケーション能力の向上のための学習会を実施した。

○成果

学生は、利用者とかかわり方、連携機関との協働・連携のあり方を学び、福祉実践基礎力は高まった。

9. 「国際ボランティア論」

○目的

文部科学省の就業力支援事業（2014年度で終了）をきっかけにして、2017《平成28》年度に引き続き、今年も、国内外における国際分野の問題などに焦点をあてながら、学生の主体性を生かすための授業や活動を同

朋大学の事業として引き続き推し進める。更に、私たちを取り巻く自然や環境への関心や働きかける力行動の育成などを含む教育課題に重点を置きつつ、実践力・行動力も身につける。

いく。

○内 容・実 績

実践学習として、地域にある国際機関（JAIC 中部）を訪問し、世界が直面する諸問題やそれらに対する取り組みなどを、同世代の海外ボランティア経験者から学んだ。さらに、地域で働いたり観光で訪れたりする外国籍の人たちへの様々な聞き取りを通して交流を図った。

○成 果

異なった講義での各々の学びを小グループごとに活かしあい、有意義な経験をし、福祉実践基礎力が高まった。

10. 「傾聴活動論」

○目 的

傾聴に学ぶ。傾聴士とは何かについて理解し、その役割も知る。同朋大学認定「傾聴士」（一種）（二種）の資格取得に向けて、その理論と実践のあり方について理解する。

○内 容・実績

ボランティア論、カウンセリング論、人間関係論、コミュニケーション論などさまざまな理論を援用して傾聴の態度を身に付ける。また、実際に傾聴活動をしている実践者の特別講義を聴く。さらには1回3時間の予定で高齢者施設に傾聴ボランティアに行く。

1) 受講学生 10名

2) 実施日時

平成30年4月11日（水）から平成30年7月25日（水）までの水曜日1限（9時～10時30分）15回実施した。

また、平成30年7月11日（水）1限は、いなべ市社会福祉協議会の話し相手ボランティア（傾聴ボランティア）養成講座を修了し傾聴活動をしている2名の社会人特別講師と担当職員1名を招いて講義を拝聴した。

○成 果

学生は、ボランティア論、カウンセリング論、人間関係論、コミュニケーション論の学びを通じて、傾聴の技能を身につけ、また実際に傾聴活動をしている実践者の特別講義を拝聴し、傾聴力が高まった。

11. 「その他（実務家を招聘する科目）」

○目 的

主に3・4年生のゼミ（社会福祉専攻：社会福祉演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ、子ども学専攻：総合演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ）において、ゼミ担当者がゼミの学習内容を深めるために、社会福祉現場で働く実務家を招聘する。そしてスムーズな就業につなげるための一助とする。

○内 容

企業・地方公共団体・社会福祉施設・教育機関等の第一線で働いている実務家に就業動機、職務内容などの講義を拝聴するとともに、学生が実務家とコミュニケーションを図ることにより、ゼミの学習内容を深める。

○実 績

平成30年4月11日から平成31年1月17日にまでの講義期間の主に水曜日の2限、木曜日の2限で、専任教員18名のうち、5名がゼミの時間内に1回、各界の実務家を招聘しゼミを実施した。

○成 果

主に3・4年生のゼミにおいて、ゼミ担当教員がゼミの学習内容を深めるために、社会福祉現場で働く実務家を招聘し、スムーズな就業につなげる一助となった。

12. 「インターンシップⅠ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」

○目 的

将来のキャリアに関連した就業体験をする。

協力機関での職務を積極的に行い、実社会で必要な知識・スキル・態度・倫理観を体得する。各自の学習や進路適性を述べるができる。

○内 容・実績

企業・地方公共団体・社会福祉施設・教育機関等における就業体験を通じて、講義等で得た知識を確認するとともに実社会におけるルールを肌で感じ、社会で生きる上で必要な態度やスキルを身につける。さらに、今後の学習方針を自ら確かめ、進路適性を確認する。

インターンシップ科目は、協力機関での30時間～40時間の従事時間のほか、事前・事後指導を含めた学習をする

①ガイダンス、②学生の関心、適正などから協力機関を決定する、③申込書の提出、④インターンシップ計画書の作成、⑤事前指導、⑥挨拶、下見、⑦協力機関での就業体験、⑧教員等の巡回指導、⑨事後学習

インターンシップは、目的に応じていくつかの類型に分けることができるといわれている。大別すると、(1)職場体験型、(2)課題解決型、(3)実務実践型、(4)採用直結型という分け方がある。

社会福祉学部では社会福祉現場実習、教育実習やボランティア活動などがインターンシップに該当すると言える。社会福祉現場実習、教育実習は「(3)実務実践型」に該当し、ボランティア活動は「(2)課題可決型」に該当すると思われる。本学では、インターンシップをこのような基本的な考え方に基づいて参加率の現状を把握すると、約30%である。

しかし、文部科学省がインターンシップの基本的な考え方は、実習を除くということである。この考え方で参加人数を把握すると11名ということになる。学生は実習で手一杯で、実習以外のインターンシップまで参加する余裕がないと考えられる。

○成 果

参加学生は、将来のキャリアに関連した就業体験をし、インターシップ先での職務を積極的に行い、実社会で必要な知識、スキル、態度、倫理観を体得することができ、福祉実践基礎力が高まった。

Ⅲ. 同朋大学社会福祉学部福祉実践基礎力と
アクティブラーニングについて

○目 的

同朋大学社会福祉学部では、豊かな教養を培って人間と社会に関する心理を探求し、社会福祉及び関連分野に関する専門的知識と技能を習得して、共に生きがいのある社会の実現に寄与するための教育・研究を行っている。そこで、通商産業省が提唱した社会人基礎力をもとに、平成24年度より社会福祉学部の学生に必要な福祉実践基礎力を考案し、毎年測定して教育に反映させるよう努めている。また、教育効果を高めるために、教科内容に合わせてアクティブラーニングの手法も取り入れるよう努めている。

○内 容

本学部の目指す人材を育成するために、初期段階としては基礎学力や専門知識などの育成を図っていて、さらに福祉実践基礎力を目標にして教員や学生を測定しながら育成を進めている。この福祉実践基礎力は、「心が動く力（主体性、協働性、目的性）」、「じっくり考える力（課題分析力、計画力、気づき力）」と、「共に生きる力（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレス把握力、ストレス解消力）」の3つの能力から構成されている。前者2つは個人的能力で、最後のものは社会的能力になる。

この福祉実践基礎力を測定するために、学生用には「同朋大学福祉実践基礎力診断票」を作成し、年度末に1～4年生の学生に「学びあい×キャリアポートフォリオ（webポータルサイト）」よりweb経由で入力し

目 黒 達 哉

■福祉実践基礎力の学年別平均点の推移（平成 27～30 年度）

	心が動く力				じっくり考える力				共に生きる力			
	平成 27年度	平成 28年度	平成 29年度	平成 30年度	平成 27年度	平成 28年度	平成 29年度	平成 30年度	平成 27年度	平成 28年度	平成 29年度	平成 30年度
1年生	3.90	3.47	4.08	3.79	3.64	3.24	3.79	3.67	3.62	3.30	3.80	3.68
2年生	4.02	3.37	3.98	3.69	3.58	3.25	3.67	3.40	3.67	3.22	3.72	3.61
3年生	4.23	3.21	3.96	3.71	4.04	3.05	3.63	3.51	4.06	3.08	3.72	3.60
4年生	3.88	3.59	4.13	3.74	3.57	3.27	3.82	3.50	3.69	3.43	3.90	3.90

（注）数値の範囲は1～5で、5に近い方が各々の力は強い。

て集計している。

○実 績

福祉実践基礎力は、社会福祉学部の学生に必要な能力を表す一つの指標として考えられたものであるが、各学年とも平成 28 年度は一旦下がったが、平成 29 年度は急に高くなっているが、平成 30 年度は若干下がった。過去 4 年間では、3 年生を除けば、平成 29 年度が最高の値になっている。もちろん数値が上下することはあるが、平成 28 年度までには下がっていない。したがって、福祉実践基礎力が上下しながら全体的に上昇傾向にあり、今までの取り組みが定着しつつあるものと推察される。

○成 果

福祉実践基礎力を考案したことは、学生や教員に具体的な学びや育成の方向性を与えてきた。そして、具体的な能力や要素を掲げることによって、学生や教員の目指す教育内容を、人材育成という側面からわかりやすく理解できたと思われる。この方向性と教育方法が絡み合って、学生たちのインセンティブが上下しながらも上昇傾向にあるようだ。

お わ り に

同朋大学社会福祉学部では、平成 22 年度文部科学省大学改革推進等補助金「大学生の就業力育成支援事業」に応募し、「持続可能な福祉実践力

を高める取り組み」というテーマで採択された。引き続き平成 24 年度から平成 26 年度においては「産業界のニーズに対応した教育改善・充実整備事業」に採択され、中部地区 23 大学の参加校として、東海 B チームに所属し、「アクティブラーニングの活用」、「地域連携事業」を推進し、福祉実践基礎力、福祉実践力の向上を目指して事業を推進してきた。その後、中部圏教育改革ネットワークの一員として参加校との連携を継続している。平成 27 年度からは大学において自己資金を投入し、「同朋大学社会福祉学部 大学教育改革推進事業」として 4 年間事業を継続している。大学関係者のご理解とご協力に感謝の意を表したい。今回、報告したように、アクティブラーニングを活用した教育内容、地域・産業界との連携力の強化を図る中で、学生の福祉実践基礎力が高まったと考えられる。今後ますます学生の福祉実践基礎力が高まるように、来年度も教育プログラムの質を高めたいと考えている。

目 黒 達 哉

注記

- 1) アクティブラーニングとは、授業者が一方向的に知識伝達をする従来型の講義形式ではなく、学生参加型授業、共同学習を取り入れた授業、課題解決型学習やPBL (Problem-Based Learning/Project-Based Learning) など、学生の能動的な学習をとりこんだ授業を総称するもの。

引用文献

- 1) 平成 24 年度「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」申請書
- 2) 同朋大学社会福祉学部 平成 30 年度大学教育改革推進事業 同朋大学社会福祉学部教育プログラムの概要、2018。
- 3) 同朋大学社会福祉学会 S 学会ジャーナル Vol.20, 2019.

参考文献

- 1) 和木康光『同朋和敬 — 同朋大学のあゆみ —』中部経済新聞社、2002。
- 2) 中央教育審議会『学士課程教育の構築に向けて（答申）』2008。
- 3) 角方正幸・松村直樹・平田史昭（共著）『就業力育成論 実践から学ぶキャリア開発支援策』学事出版、2010。

謝辞

この実践報告をまとめるにあたり、中部圏ネットワーク委員会（旧 産業界ニーズ委員会）の委員の先生方をはじめ、社会福祉学部の教職員、学務部の教職員の皆様の協力を得た。ここに感謝の意を表します。

（本学社会福祉学部教授：傾聴活動論、ボランティア活動）